

英国の舞踊教育システムに関する研究

—その現状と課題—

川口千代・大貫秀明*

A study on system of Dance Education in the United Kingdom

Chiyo KAWAGUCHI, Hideaki ONUKI

The purpose of this study was to research what dance education should be through the examination on system of dance education in the United Kingdom.

Especially, we examined the historical facts and development of dance education in the United Kingdom, and we took hold of their state of affairs and investigated problems in these days.

1. 緒言

英国の舞踊教育は、Rudolf von Laban (以下 Labanと略)の運動の分析と体系論と実践が背景となって教育として普遍化したといわれる。前研究では、英国の初等・中等教育のDance Syllabusを中心に検討した。その結果、内容的には、身体と動きの観点から、what (身体は何ができるか—全身、部位)、How(どのように動くか—空間、時間、力性、流れ)、Where (どこへ—方向、高・低など)を根底に、動きの原理から導き、また、Relationshipをも強調し、いわゆる「自主創造の活動と身体訓練、社会的行動と身体訓練」の総合された独自の教育形態をとっている¹⁾ことが明らかとなった。

英国においては、これまでの低年齢からの発達段階に応じた舞踊教育の充実を計っている一方、近年、高等教育機関(Higher Education, 大学レベル)における舞踊教育システムの急速な活性化への動き²⁾がみられる。

これら二つの動向は、一見、初等・中等・高等教育と一貫性をもった有効な舞踊教育システムと思われる。しかし、内実は困難な問題を含んでいる現状である。即ち、初等・中等教育における舞踊教育の内容と、新しく専科として誕生した舞踊学士、舞踊修士、舞踊博士の課程の授業科目内容の相違の問題や、修了後の進路の問題等があげられる。

本論では、英国の舞踊教育システムに関して、英国の舞踊教育の歩みをふまえ、現状を把握し、そこに潜む今日的課題を明らかにし、我が国をはじめ、今後の舞踊教育の在り方を論ずる上での方向性を見いだそうとするものである。

2. 英国舞踊教育の歩み

英国の学校教育における舞踊教育の始まりは、体育のカリキュラムに舞踊が組み込まれた時期といえる。即ち、スウェーデン体操の創始者であるリング(Per Henrik Ling)の影響下にあったスウェーデン出身のオスターバーグ夫人(Mrs. Martina Bergman Österberg)が1880年にロンドンのハムステッドに建てたThe Vergman Osterberg Physical Training Collegeから始まった。そこでは、ワルツがそしてスウェーデンのナ

* Master Degree in Movement Study and Dance, University of London, 1982.

在. Laban Institute Dance Notation Bureau in New York.

ショナルダンス等が教授された。この体育大学で教育を受けた³⁾教師たちによって、陸上競技、体操、水泳そしてダンスが指導された。

このオスターバークの努力によって1909年に初めてDance Syllabusの誕生をみた。この隆盛に更に拍車をかけたものに、1912年に、当時ドイツに拠を構えて活躍中のダルクローズ (Emil Jaques Dalcrose) のユーリズミックの英国への紹介があった。

その後、著しい変化はみられなかったが、約20年後、英国の舞踊教育界は一つのエポックを迎える。即ち、30年代に入り I.M.Marsh College (Liverpool), Nonnington College (Kent), Chelsea College (London), Lady Mabel College (York) の各大学において次々とDance Syllabusが作成され、カリキュラムにDanceの名称が登場した。しかし、英国の舞踊教育界にとって、30年代の真の意義は、Labanを英国に迎えたことであろう。Labanは、モダンダンスの「運動」(Movement)の感覚と理解を育てる上での高い価値を説いた³⁾。当時、ドイツのアドルフ・ヒトラーの権力掌握にもとづく個人に対する政治的弾圧と迫害のため、多数の自由主義的な体育改革者達は、英国に活路を求めている。その中のひとりにLabanがおり、1936年に英国に渡り、寛容と勇気の気風の中で彼の理論を発展させた³⁾。Laban以前にすでに、彼のモダン・ダンスの弟子兼学生であったクルト・ヨース (Kurt Joose), スィガード・レーダー (Sigurd Leeder) 等も渡英していた。

Labanの来英以来、Labanとその高弟であるリサ・ウルマン (Lisa Ullman) が開いた舞踊コースは、すでに教育の現場にある舞踊に携わる教師たちを魅了したといわれる。

舞踊コースは、ウェールズのニューポートから始まり、本格的に拠を構えたイングランドのマンチェスター(1943年)、そしてサリー州のアドレスデン (1953年)⁴⁾に移ってもその趨勢は止まることがなかった。

この間に、Labanが英国の舞踊教育界に及ぼした影響は多大で、「英国の舞踊教育はすなわちラバンの舞踊教育である」と極論されるに至った。公立校 (Maintained school), 私立校 (Independent school) を問わず、小学校 (Junior, Primary), 中学校 (Secondary) レベルの舞踊に携わる教師も

しくは舞踊に興味をもつ教師が何処にLabanにこれ程までに傾倒したのか関心のあるところであるが、これを裏付ける理由として、次の様なことが挙げられる。

当時、英国の教育界は、デューイ (John Dewey) のプラグマティズム⁴⁾に基いた教育理念を軸に、児童・生徒の主体性ならびに経験を重視し、しかも自由で創造性を育くむことの可能な教育を目指す気運が高まっていた。

表現活動の一環としての舞踊は、この目的に合致し、しかも、舞踊についての明確な理念を提示したLabanの出現は、機を得て重要視された。

Labanの提示した理念³⁾は、①運動の4つの要素——重さ (Weight)・空間 (Space)・時間 (Time) および流れ (Flow), ②重さ・空間・時間の8つの基本的組合せの動き (図1⁵⁾参照)

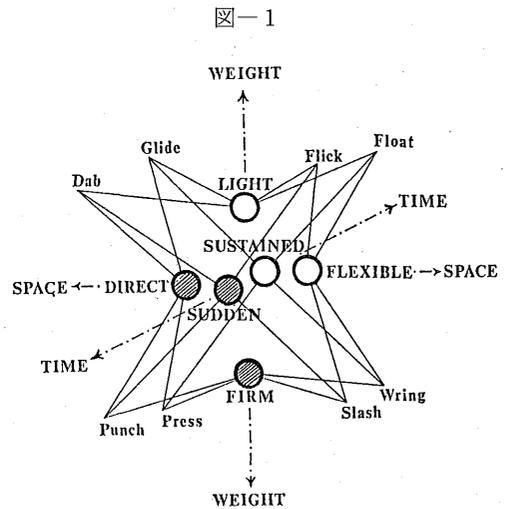


Fig. 1 The six effort elements and the eight basic effort actions. Shaded circles show elements fighting against, open circles show elements indulging in, weight or space or time

Rudolf von Laban 「Modern Educational Dance」⁵⁾より

——Slash・Press・Wring・Punch・Glide・Dab・Flick・Float, および, ③16の運動のテーマ(表1⁵⁾)

参照)を分析し体系づけた。

Labanが、彼の理論の有効性を如何に強調したかは、次の一文例⁹⁾からも窺える。「強さの細やかなニュアンスでPressとGlideの感覚を区別することを学んだ人は、これら二つのEffortの間の移り変わりが含まれている実際の課題を、このような

感覚を意識的にこれまで経験したことのない人よりずっと巧みに、かつ容易になしうるであろう。」と述べ、また、「8つの基本動作を身につけた人は、直面するいかなる課題に対しても正しい運動を選ぶことができよう⁹⁾」と、自信に満ちた主張をしている。

表-1

SIXTEEN BASIC MOVEMENT-THEMES	
<i>ELEMENTARY MOVEMENT-THEMES</i>	
1.	Themes concerned with the awareness of the body
2.	Themes concerned with the awareness of resistance to weight and time
3.	Themes concerned with the awareness of space
4.	Themes concerned with the awareness of the flow of the weight of the body in space and time
5.	Themes concerned with the adaptation to partners
6.	Themes concerned with the instrumental use of the limbs of the body
7.	Themes concerned with the awareness of isolated actions
8.	Themes concerned with occupational rhythms
<i>ADVANCED MOVEMENT-THEMES</i>	
9.	Themes concerned with the shapes of movement
10.	Themes concerned with combinations of the eight basic effort actions
11.	Themes concerned with space orientation
12.	Themes concerned with shapes and efforts using different parts of the body
13.	Themes concerned with elevation from the ground
14.	Themes concerned with the awakening of group feeling
15.	Themes concerned with group formations
16.	Themes concerned with the expressive qualities or moods of movements

Rudolf von Laban 「Modern Educational Dance」⁵⁾より

この様な、16の運動のテーマに凝縮されたLabanの舞踊教育に関する理念は、それまでの漠とした考えの舞踊教育の現場に、直接的に活用できるという安心感を与え、教師達は、次第に自信をもって実際指導にあたった。

こうして、いわゆる英国式の舞踊教育、即ち、就学年令の低い段階からの舞踊教育は、舞踊に携わる教師に多大の恩恵を与えつつ、充実し原型が築かれたとみられる。

しかし、その拡充・普遍化の一方で、Labanの心酔者達による本来のラバンの理想とは異った方向への主張がみられたり、方法論の表面的なとらえ方のみに留まったりという現象が現われてきたと

いわれる。即ち、「16の運動のテーマ」は、授業計画を立案する上でも段階がはっきりとして活用しやすいということから、教師達が安易に安住の基盤を固めてしまったという点。また、「Modern Educational DanceとMovementは、すべての体育の基礎であり、Labanの原理はすべての身体的課題を分析するための枠組ばかりでなく、あらゆる競技とスポーツならびにダンスと体操の教授法をも提供している⁹⁾」と、主張する心酔者達が出てきた点などから推察できる。

たしかに、Labanの16の運動のテーマは、分析的すぎるきらいはあるが、真の分析は創造につながるというLabanの理想とする理念を、すべての教

師達が理解できなかつた点に問題があるといえよう。このことは、デュイの教育理念をも充分にくみとれなかつたことにつながる。ここに、英国の舞踊教育におけるひとつのつまづきがあったといえる。このことは、英国の舞踊教育が、発達段階に則して内容の発展がみられ¹⁾、舞踊による豊かな人間教育を指向していたにもかかわらず、高就学年令層への拡充が必ずしも充分でなかつた事実からも推察できる。

3. 英国の高等教育機関における舞踊教育

この間、アメリカでは²⁾、1921年にM.ドゥブラーが「創造的芸術経験としての舞踊」として舞踊の原論をうちたて、ウィスコンシン大学に、はじめて舞踊の研究と教育を位置づけて以来、大学レベルを中心とした舞踊教育が、新しい形式の舞踊としてModern Danceをとり入れ、興隆の兆をみせていた。

英国の舞踊教育も、次第にその影響を受けつつ、今日へと移行してくる。例えば、Bedford, Dartford, Warwick CollegeならびにLeeds Universityなどで体育のカリキュラムの中にDanceをとり入れるようになった。

また、小・中学校レベルのカリキュラムでは、単にDanceという単元名が、Modern Educational Dance, Modern Dance, Creative Danceという名称の変化をみることができ、その影響の大きさが窺える。

更に、英国の舞踊教育の歩みの中で特筆すべきは、大学レベルにおけるHuman Movement Studies (以下H.M.S.と略) という専科の誕生である。1967年にロンドン大学Goldsmiths' Collegeに設置され、H.M.S.の名の通り、人間の動きに関する学問として、内容的には舞踊の研究・実技を中心としている。ここで、何故、Danceという名称を使用せずにH.M.S.として専科を設置したかであるが、H.M.S.はその属性として舞踊を内包しつつ、より広い学問研究へのアプローチ、例えば、舞踊と関連して人間行動における心理的側面等の学問研究も可能であるとの考え方に帰因している。事実、Labanotation, Effort rotation, Motif writingを使用してのMovement analysisも、他の学問領域の舞踊への応用と並行して教授されている。

しかし、何よりも名称をDanceではなく、Human Movement Studiesとせざるをえなかつた大きな理由に、英国の大学のアカデミズム偏重ということが考えられる。

このことは、英国独特の国家検定試験制度¹⁾⁸⁾C. S.E. (Certificate of Secondary Education・中等教育証書)、G.C.E. (General Certification of Education・一般教育証書)の0レベル (Ordinary level・普通級)の試験科目に舞踊が加わる際にもみられた。

即ち、その認可に際しては、大学関係者の専門委員会を設け、そこから論議を経て採択となる故、かなり困難を極めたといわれている²⁾。また、内ロンドン教育庁の舞踊教育者協会 (I.L.D.T.A・Inner London Dance Teachers Association)のMichelle Innis女史によると、G.C.E.のAレベル (Advanced level, 上級)に舞踊を加えるべく準備中²⁾とのことであるが、この認可に際しても同様の論議があるものと推測される。このような状況にあって、英国舞踊教育に今ひとつ、新しい変化がみられる。C.N.A.A. (The council for National Academic Awards) ³⁾が大学の芸術分野に、舞踊を一専科として認めたことである。

1976年、Laban Centre for Movement and Danceが、パイロット・ケースとして舞踊学士 (Bachelor of Arts in Dance)のコースを設け、1978年には、リサーチ・ディグリーとしての舞踊修士 (Master of Philosophy in Dance)ならびに舞踊博士 (Doctor of Philosophy in Dance)が、そして、1981年には舞踊修士 (Master of Arts in Dance)が設けられた。ここに至って、英国の特に大学レベルの舞踊教育は、体育の一科目として、また、Human Movement Studiesの別称のもとに大学に存在すると共に、芸術分野の一専科としてはC.N.A.A.の管轄下⁴⁾に存在することになり、更に、準備中のG.C.E.のAレベルの舞踊が実現すると、他国に例をみない、初等・中等・高等教育機関の縦のつながりをもったシステムの完遂を迎えることとなる。

4. システムの充実と問題点

これまで述べてきた通り、システムの充実を迎えつつある今日の英国舞踊教育界にも、現実的な問題が潜んでいる。

1つは、LabanのMovement Educationの理念に根ざした、下からの教育を目指す初等、中等教育段階の舞踊教育の内容と、高等教育機関である大学の舞踊専攻課程の教育内容(カリキュラム構成)のギャップの問題である。現在、進行中の認可されようとしているG.C.E.のAレベルの舞踊のSyllabusは、未公表ながら、その内容は、0レベルと基本的には同質のものであるが、0レベルより一層細分化しているといわれる。ちなみに、0レベルのSyllabusの内容は²⁾、Technique, 創作, 舞踊実践理論 (Theory of Practice of Dance——例えば、Labanotation, 初歩の舞踊分析とその応用) および舞踊史の三つの分野から構成されている。0レベルの上級とされるAレベルの認定試験では、これら大枠の内容が更に細分化した高度な形で要求されてくるとみるべきであろう。しかるに、大学の舞踊専攻の課程に進学を希望する者は、当然、Aレベルを受験することになるであろうし、受入れられる大学側もAレベル合格を条件づけるであろう。しかし、初等・中等教育段階での舞踊教育の内容の範囲では、十分にAレベルに応えるだけの教育がなされていないとすれば、Aレベルの舞踊を受験しようとする者が非常に限られてくることが予測される。

問題の二つ目は、大学における舞踊専攻の教育内容が、いわゆる教育を志向する形で構成されていない点である。舞踊専攻の卒業生は、教科教育関係の学習不足から、現行の英国の学校教育機関における舞踊の教師として採用されることは極めて困難な状況になっている。したがって、学校以外の方面に活路を求めざるを得ない。多くの者は現代舞踊界で舞台活動を目指そうとするが、その可能性は極めて少ないといえよう。他の活路としては、コミュニティ・センター等における舞踊関係の実技指導、あるいは、精神科医との協力体制による舞踊療法 (Dance Therapy) なども考えられるが、いづれも需要度は低いとみられる。これらが、現在、英国の舞踊教育界が抱えるプラクティカルな問題点である。

英国の舞踊教育界は、今確かに、その教育システムの外郭を明瞭化しつつある。

しかし、そのシステムが真の意味で完全か否かは、上記の問題を考える時、疑問の残るところである。

5. 結 び

今日の英国の舞踊教育は、初等・中等教育段階における一貫した「自主創造の活動と身体訓練、および社会的行動と身体訓練の総合された教育形態」をもち、それを支える、大学の体育のカリキュラムに組込まれた舞踊コース、Human Movement Studiesや芸術学部に設けられた舞踊専攻課程における舞踊教育と、縦のつながりをもって教育システムが充実しつつある。しかし、そこにはいくつかの問題が潜んでいることが明らかとなった。

舞踊を教育として位置づけるには、舞踊の本質をとらえた上で、「舞踊の教育」と「舞踊による教育」の両側面からのアプローチが必要である。英国の今日の舞踊教育は、初等・中等教育段階では、「舞踊による教育」の考え方が強く、高等教育段階では、「舞踊の教育」に力点がありすぎ、「舞踊による教育」がなおざりにされてきつつあるとみられる。ここに、前述の問題が出てきた由縁があると考ええる。舞踊教育は、年令の低い段階、経験の浅い段階から、発達・経験に応じて、舞踊本来の特性をふまえて、「舞踊の教育」「舞踊による教育」の両側面からアプローチし、舞踊の洗練と、舞踊によるより豊かな人間教育を指向すべきものと考ええる。

本研究では、英国の舞踊教育システムの現状を把握しつつ、その今日的課題を明らかにしたが、英国に表わされた現象は、ややもすると、我が国においても同じ轍を踏みかねない状況をもっているといえよう。

今後、舞踊教育に携わる者ひとりひとりが、常に「舞踊の教育」と「舞踊による教育」の両側面からの教育指導内容を検討することが課題であると考ええる。

注1) Labanの舞踊コースは、The Art of Movement Studioの名称で開発されていたが、1974年には、Laban Centre for Movement and Danceの名称に変わり、ロンドンのニュークロスにある、ロンドン大学Goldsmiths' College内に移設された。現所長はDr. Marion Northである。

注2) C.S.E.の舞踊は1973年に、またG.C.E.の0レベルの舞踊は1980年より発足している。

注3) C.N.A.A.は1964年に王室より認許状 (Royal

Charter)を受けて以来、現在では英国における最大規模の学位授与団体に成長した。その発足の根本的な理由は、従来の大学が学位を出しにくい科目に対しての学位授与ということにある。ちなみに、Polytechnicより授与される学位はすべてC.N.A.A.のものである。

注4) ごく最近になり多少の変化がでてくる。1981年度よりSurrey Universityの芸術学部に舞踊の専科が誕生し、また、1982年度よりKent UniversityがLondon Contemporary Dance Schoolと提携してBA in Danceの課程を発足させた。

引用文献

- 1) 川口千代：英国におけるDance Syllabusとダンス学習内容の検討，筑波大学体育科学系紀要，第6巻，1983，P.18，P.12
- 2) ILEA/ILDTA G.C.E. 'O' Level Conference, Joan W. White : G.C.E. 'O' Level Dance Mode 2 The Syllabus Content, 1980. P.98
- 3) ジョン・ケーン編著，村山輝志他訳，：学校体育カリキュラムの発展，不昧堂出版，1982，P.36，P.37，P.39
- 4) 哲学事典：平凡社，1966，P.841
- 5) Rudolf von Laban : Modern Educational Dance, Macdonald & Evance, 1963. P.25~49 (抜粋)，P.35.
- 6) Rudolf von Laban : Effort, Macdonald & Evance, 1947.

- 7) 松本千代栄：舞踊教育の比較研究，女子体育，第19巻，第3号，P.47，1977
- 8) 森嶋通夫：イギリスと日本——その教育と経済——岩波書店，1977，P.101

参考文献

- 1) Best, D : Philosophy and human movement, George Allen and Unwin, London, 1978.
- 2) Clarke, M.他(編) : The Encyclopedia of Dance and Ballet, Pitmann Publishing Lod, London, 1977.
- 3) Downey, M.E.他 : Theory and practice of education, Harper and Row, London, 1975.
- 4) John E. Kane : Curriculum Development in Physical Education, Crosby Lockwood Staples, 1976.
- 5) Marion North : Movement Education, Temple Smith, London, 1973.
- 6) 松本千代栄：第二次大戦後におけるダンス学習の発展と今後の課題，日本体育学会第34回大会・体育科教育学専門分科会シンポジウム資料，1983.
- 7) Nadel, M.H.他 : The dance experience, Universe Books, New York, 1978.
- 8) Rudolf von Laban : The Mastery of Movement, Macdonald and Evans, 1971.
- 9) Valerie Preston - Dunlop : A Handbook for Dance in Education, Macdonald and Evans, 1980.